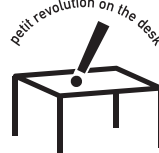


Vol.48

机の上の小さな変革



アクセシビリティとポテンシャル

こんにちは、菅俊一です。今回は自分の行動をうまく設計するためのある方法について、みなさんと実践してみたいと思います。



私たちの身の回りにはモノが溢れていますが、モノの状態をよく見てみると、多くの場合、使っている時間よりも使われることを待っている状態のほうが圧倒的に長いことがわかります。

たとえば、ペン立てに入っているボールペンを見ても、これまで文字を書くために使われてきた時間よりも、立てられている時間のほうが圧倒的に長いですし、自宅にある様々な食器も、食べ物や飲み物を入れている時間よりも棚の中にしまわれている時間のほうが長いはずです。それでは、このようなモノの待機時間を、極端に短くしたら、どのようなことが起こるのでしょうか。

極端に短くするといっても、ずっとそれを使い続けるのは現実的ではないので、ここでは「待機状態の際に、できるだけ身体に近づけて常にアクセスできるようにする」ことを考えてみましょう。

たとえば、出しっぱなしにしておく、なるべく触れ続ける、身体に取り付けておく、見やすくするといったアプローチが考えられます。

今回は、「小さなメモとペン」「飲み物の入ったペット

ボトルか水筒」「折りたたみ傘」といったモノから1つ選んで、1週間ほど、カバンからすぐに取り出せる位置に入れておいたり、ポケットの中に入れておく、首から下げるなど「常に持ち歩き続け、すぐに使えるようにする」という形で、モノへのアクセシビリティを圧倒的に高めてみることを意識してみてください。

モノのポテンシャルを引き出そう

これを1週間ほど生活のなかで実践してもらおうと、モノ本来のポテンシャルが引き出される経験ができるのではないかと思います。

たとえば、小さなメモとペンの場合は、普段身に付け続けることによって、ちょっとしたことですぐにメモをとるようになり、「記憶の外部化」という形で頭の中に何かを覚えておく要素を減らすことができます。ペットボトルや水筒の場合は、常に飲み水が手元にあることから1日に摂取する水分量がこれまでと大きく変化したり、折りたたみ傘の場合はずっと持ち歩くことで突然の雨天にも対応できるようになるため、日常的に天気予報を見て雨かどうかを気にすることが減るのではないかと思います。

このように、モノの接触時間や回数を増やして自身の行動のハードルを下げることで、モノが本来持っていた利便性や機能の真の姿に気づくことができるのです。▲

PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。